国際女性デー
大阪集会
３月８日（日）
13：00〜16：00
エル・大阪

大阪教育

女性部版　分会で回覧してください。

No.8
2009年2月27日

〒543-0021
大阪市天王寺区東高津町 7-11
大阪教育会館 7F
☎ 06-6768-2330
fax 06-6768-2239

大教組女性部教研

どの子も大事 親も教師も願う教育

1月24日土曜日、大教組女性部教研がエル大阪南館ホールで開かれ、約140名の参加がありました。バザーのコーナーでは、各単組で工夫して作られたメモや匂い袋、クッキー、コーヒー等が販売されました。手作りコーナーでは、折り紙で作るコマや紙風船、ランプシェイドを作りました。このコーナーで楽しんだ後、都留文科大学教授の佐藤隆さんに「競争で学力は向上するのか〜フィンランドから学ぶこと」と題した講演をしていただきました。講演の要旨を紹介します。

「学力」とは何か

２０００年くらいから子どもたちの学力が社会問題化してきました。ＰＩＳＡの学力調査の結果、フィンランドが第一位になり、日本の順位は下がりました。当時の中山文相は、「ゆとり教育はまちがいだった。これからはもっと子どもたちを切磋琢磨させなければならない。」と競争で学力を上げようとする発言をしています。しかし、学力が下がったら何が大変なのでしょうか。「学力」とは何かを考えないで、ただ「下がった」とだけあわてているのではないでしょうか。

点数を上げるため

２００７年４月に全国一斉学力テストが実施されました。「知識の習得はまずまずだが、活用力が弱い。」という結果が出ましたが、そもそも、Ａ問題、Ｂ問題を作った時点で結果は分かりきっていました。ＰＩＳＡに出るような問題（Ｂ問題）を学力テストでやらせたいので、そういう結果が出るような問題を作ったのです。

新学習指導要領は、これまでのような内容の指示だけでなく、そのやり方まで指示をし教師の教育活動を縛っているという問題点を持っています。子どもにとっては、活動自体も点数化されることになっています。どの場面にも競争を持ち込んでいる。そこまでして、点数を上げたいのでしょうか。

ＰＩＳＡの学力調査は、ＯＥＣＤが世界の子どもの学習状況等を知るために行なっているものです。実際の生活の中で、知識を使えるかを知ろうとしてしたテストです。「見える部分をはかって見えない部分をはかろう」という考えで実施されているものです。しかし、日本政府の考えは、「見える部分だけ点数が良ければよい」と、実際の生活のことなど何も考えていません。

ＰＩＳＡの学力調査では、自由記述に対する無答率が、他国が20％程度なのに対して、日本は約40％。国際的な理数の調査でも、情報が少なく、慣れていない問題に対して無答率が高いという結果が出ています。「面倒くさい」と思う子どもが多い、する前からやらない子どもが増えているのです。

私たちの世代も学力が高いと言われてきました。けれど、日本的な学力の高さは、テストをすれば点数はとれるが理解はしていない、というものです。勉強は繰り返して覚えるもので、苦しいもの。そして、やっているうちは覚えているけれど、やらなくなったら忘れる、剥落学力なのです。大人の科学理解率（科学に詳しい人の割合）を調べた調査によると、日本は30％と世界的に見て最低レベルにあります。

フィンランドの教育を

それでも、十年ほど前までは、少しがんばればそれだけの見返りがありました。いい学校に入ればいい就職口が見つかり、いい生活ができたのです。しかし、年末の年越派遣村を見てもわかるように、決して子どもたちの未来は明るくありません。この暗い社会を変えていくために、フィンランドの教育を参考にしましょう。

フィンランド憲法における教育条項、「教育は無償」「国及び地方公共団体は等しくすべてのものに能力に応じた教育を保障」と日本との違いはありません。

最後に、一人一人違うのだから比べることは意味がない、人より優れているとかいないとかは大事なことではない。教育とは、自分の学び、自分の人生を自分でプロデュース力をつけることである、結ばれました。